

所), および文献情報のご教示と標本調査にご協力頂いた吉富博之博士(愛媛大学ミュージアム), 大原昌宏博士(北海道大学総合博物館)および松野茂富氏(和歌山県立自然博物館)の各位に御礼申し上げる。

## 引用文献

Biström, O., 1997. Taxonomic revision of the genus *Hydrovatus* Motschulsky (Coleoptera, Dytiscidae). *Entomologica Basilensis*, 19: 57–584.

稻畠憲昭, 2016. サメハダマルケシゲンゴロウの日本からの初記録. さやばねニューシリーズ, (21): 46–47.

森 正人・北山 昭, 2002. マルケシゲンゴロウ属. pp. 64–69. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京.

中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之, 2020. 日本の水生昆虫, 351 pp. 文一総合出版, 東京.

Nakane, T., 1990. Notes on two species of Dytiscidae (Coleoptera). *Fragmenta Coleopterologica*, 45/48: 198.

渡部晃平・保科英人, 2016. 福井県におけるサメハダマルケシゲンゴロウの記録と生息地保全に向けた対応. さやばねニューシリーズ, (24): 33–35.

Watanabe, K., N. Inahata, & O. Biström, 2020. A distributional review of the genus *Hydrovatus* (Coleoptera: Dytiscidae) from the Ryukyus, Southwestern Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 26: 111–118.

渡部晃平・富沢 章・稻畠憲昭, 2016. 本州におけるサメハダマルケシゲンゴロウの初記録. さやばねニューシリーズ, (23): 15–16.

(2020年7月12日受領, 2020年9月30日受理)

## 【短報】熊本県におけるコジュウジアトキリゴミムシの生息場所について

筆者は2020年6月8日に、熊本県阿蘇郡高森町においてコジュウジアトキリゴミムシ *Lebia (Poecilothais) iolanthe* Bates, 1883の生態写真の撮影に成功したので報告する(図1)。かつて本種は国内では記録が少ない種とされていた(川津, 1962)。実際, Habu (1983) が記録した分布地は、栃木、静岡、長野、兵庫の4県に限られる。上野ら (1985) の保育社『原色甲虫図鑑(II)』でも、本種の国内分布域は本州のみとされていた。

しかし、深町(1978)が大分県九重から既に本種を記録していたので、70年代後半には本種が九州に生息することは知られていたことになる。また、深町(1978)によれば、この時点で宮崎県から捕れている未発表個体があつたらしい。熊本県内では、大塚勲氏が1994年に阿蘇郡西原村から本種を採集している(九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. 昆虫データベース (KONCHU))。このように九州における本種の記録はいくつか散見されるものの、その

数は決して多くない。本稿は熊本県阿蘇郡における2例目の記録になる。

深町(1978)によれば、コジュウジアトキリゴミムシは燈火に飛来したことだが、本種の生態的知見は限定されている。筆者は晴天の午後2時40分に高森町の阿蘇外輪山麓の林縁部小径の草むらの葉上に静止していたところを発見し、1m程度の距離から撮影した。本稿で紹介した生息場所の知見が、今後の本種の分布記録を積み重ねていく上で、何らかの手助けになれば幸いである。

## 引用文献

深町宗通, 1978. 九重山でコジュウジアトキリゴミムシを採集. *Elytra*, 6 (2): 66.

Habu, A., 1983. Revised and supplementary notes on and descriptions of the *Truncatipennes* group of Japan (III) (Coleoptera, Carabidae). *The Entomological Review of Japan*, 38 (2): 105–146.

川津知是, 1962. コジュウジアトキリゴミムシの採集記録. 昆虫学評論, 14 (2): 47.

九州大学大学院農学研究院昆虫学教室. 昆虫データベース (KONCHU). 大塚勲氏寄贈熊本県産甲虫類データベース. (<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/colotsuka/index-j.html>)

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編著, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II). 保育社. 514 pp.

(曲田清彦 841-0046 烏栖市真木町 2031-5)



図1. コジュウジアトキリゴミムシ.

## 【短報】タイワンレンギョウの葉を食べるクロウリハムシ

クロウリハムシ *Aulacophora nigripennis* Motschulsky, 1857は、国内では本州、四国、九州、壱岐、対馬、大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古・八重山諸島、大東諸島に分布する。奄美大島以南の南西諸島は琉球亜種 *A. n. nitidipennis* Chûjô, 1935

とされている（木元, 1984；木元・滝沢, 1994；滝沢, 2011）。ウリ類の害虫として知られるが、一方でエノキやカーネーションなどウリ科以外の植物も広く餌として利用していることも知られている（小宮, 1985；西東, 1985；滝沢, 2011）。

筆者は本種がクマツヅラ科のキバノタイワンレンギョウ（タイワンレンギョウの園芸品種、以下タイワンレンギョウと呼ぶ）の葉を摂食するのを観察し、証拠標本として下記のように2頭採集しているので報告する。

2exs., 沖縄県うるま市石川市民の森（沖縄島）, 12.VI.2014, 筆者採集・琉球大学博物館（風樹館）保管。

2014年6月12日午後1時40分ごろ、公園の遊歩道に植栽されたタイワンレンギョウの生垣（高さ30～60cmに刈り込まれていた）で本種成虫17頭を見つけ、そのうち3頭が葉を摂食しているのを確認した。摂食中の個体を撮影するため接近したところ、摂食をやめ、向きを変えて動き出してしまった。図1は動き出した個体を撮影したもので、成虫の右斜め後方、葉の縁に小さな食痕が認められる。

本種は、ウリ科植物の他に多くの植物種を加害することが報告されている（小宮, 1985；西東, 1985；宇田ら, 2001）。小宮（1985）は、エノキ（アサ科）、イタドリ（タデ科）、オオシマザクラ（バラ科）、ケヤキ（ニレ科）、キキョウ（キキョウ科）への加害を観察しており、特にエノキに嗜好性があると述べている。西東（1985）は、本種がカーネーション（ナデシコ科）を加害すること、そして宇田ら（2001）もカワラナデシコやカーネーションを含むナデシコ属植物を加害することを報告している。さらにフジ（マメ科）への加害も記録されているという（小宮, 1985 参照）。今回、沖縄島で新たにタイワンレンギョウ（クマツヅラ科）への加害が記録された。以上のように、クロウリハムシは草本から木本まで、ウリ科植物以外のタデ科やアサ科など7科に属する多様な植物種を餌として利用していることがわかる。



図1. タイワンレンギョウ葉上のクロウリハムシ。

## 引用文献

木元新作, 1984. ハムシ科. 林 匡夫・森本 桂・木元新作（編著）  
原色日本甲虫図鑑（IV）: 147-223. 保育社. 大阪.  
木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説.  
539 pp. 東海大学出版会. 東京.  
小宮義璋, 1985. ウリハムシとクロウリハムシの代用食. 月刊む  
し, (178): 4.  
西東 力, 1985. カーネーションを加害するクロウリハムシの  
発生生態と防除 1. 加害様相及び生活史. 関東東山病害虫  
研究会年報, (32): 212-214.  
滝沢春雄, 2011. 日本産ハムシ科生態観書 (5). 神奈川虫報,  
(173): 35-51.  
宇田 明・八瀬順也・中山正仁・藤井 紘, 2001. ある種のダイ  
アンサスをおとり植物にしたカーネーションを加害するク  
ロウリハムシ (*Aulacophora nigripennis*) の防除. 園芸学雑  
誌, 70: 753-759.

（小浜継雄 901-2216 宜野湾市佐真下 28）

## 【短報】石垣島の鍾乳洞内で採集されたエンマムシ 2種

ホルンナガエンマムシ *Platylistes (Platylistes) horni* (Bickhardt, 1913) は奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島、与那国島および台湾から知られる種で (Ôhara, 2010), 生息環境に関する知見は報告されていないと思われる。

ナカネナガエンマムシ *Platysoma (Platysoma) takehikoi* M. Ôhara, 1986 は与論島、竹富島、石垣島、西表島、与那国島、台湾および韓国から知られる種で (Ôhara, 1986; 沢田, 1989; 佐々木ら, 2002; Seung & Lee, 2019), 生息環境に関する知見は、「樹皮下で発見されることが多く、今回も湿気を多く含んだ倒木で採集した」という記述 (沢田, 1989) がある。なお、上記の分布のうち、与論島の記録 (佐々木ら, 2002) は一次文献が不明であり、また、韓国の記録 (Seung & Lee, 2019) は大原博士私信によれば再検討が必要である可能性がある。



図1. ホルンナガエンマムシ  
♀.



図2. ナカネナガエンマムシ  
♂.